

ごちうさメンバー達の
アピール(物理)が強すぎる

桜紅月音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごちうさメンバーからのアピールが強すぎるんだけど…僕、何かした？

目次

チノちゃん	ver		1
チノちゃん	ver 2.		14
桐間紗路	ver 1.		20
ここあ	ver 1.		35
	0		

チノちゃんver

「夜空さん…私と付き合ってくださいか…?」

ある日、いつもと同じくラビットハウスを訪れて、コーヒーを嗜んでいた時、このラビットハウスの看板娘の香風チノ（通称チノちゃん）に声をかけられ、そう告げられたのである。

「買い物ってことかな?」

チノちゃんとは、チノちゃんのお父さんであるタカヒロさんから買い物に連れて行ってくれないかとか一緒に遊んでくれと言われ、チノちゃんとよく居る仲なので、今回も買い物だろうと思つた僕は、そう返す。

しかし、チノちゃんから返ってきた言葉は――

「違います。買い物という意味ではなく…私の恋人になつて欲しいんです」

買い物でもなく…はたまた、一緒に遊ぶ訳でもなく…。

恋人——つまりは、クリスマスになったらうざく見えるカップル——になつてと告げられた。

「チノちゃん…冗談でも言つていい事と言つてはいけない言葉があるよ」

鈍感とかめちやくちやに言われている僕だけど…流石にこの告白は、冗談つていうのは分かる。

「冗談では無いです…私の…この気持ちは…本気です」

とチノちゃんは、何かを決意した目で僕の事を見ってくる。

「冗談じゃなくて…?」

「だから！冗談ではありません！本気です！」

とチノちゃんは、頬をプクツと膨らませて言ってくる。

「本気なら…返事しないといけないよね…」

「今すぐには言いませんが…なるべく早く返事をください」

早く返事を欲しがってる証拠だよそれ…。

ともあれ…返事はしないといけない。

* 選択肢（どちらかを選んでください）

1. 受け取る
2. 断る。

貴方は、チノちゃんの告白を受け取った

チノちゃんの告白を、僕は悩みに悩んだ結果…受け取ることにした。

「チノちゃん…告白の返事なんだけど…」

僕が口を開け、チノちゃんにそう言う。

チノちゃんは、何かしらの期待を持っているかのように、こちらを見てくる。

「チノちゃんの告白を受け取ってもいいかな…って」

「ということは…夜空さんと恋人になるということですか？」

「そういう事」

チノちゃんと恋人になる。

告白を振って、恋人にならないという選択肢は無いに等しい。

むしろ、チノちゃんみたいな美少女を振る奴がいたら、そいつを殴ってやりたくらいだ。

「良かったです…これで、夜空さんを私だけの物に…」

「チノちゃん…?」

「何もありません！夜空さんと恋人になれて…とつても嬉しいです」

「喜んでくれるなら…僕も嬉しいよ」

とチノちゃんに聞こえるように言うと、チノちゃんは、とても輝かしい笑顔で僕の方を見て

「今から、夜空さんは、私だけの物ですからね」

とチノちゃんは、どこに忍び込ませていたのか…包丁を取り出してこちらに走ってきた。ながらそう言ってきた。

「チノ…ちゃん…?」

「夜空さん…安心してください…私も、すぐに行きますからね」

とチノちゃんの言葉を最後に聞いたのだった。

貴方は、チノちゃんの告白を断った

チノちゃんの告白を…悲しいが断ることにした

「チノちゃん…告白の返事なんだけど…」

僕が口を開け、チノちゃんにそう言う。チノちゃんは、何かしらの期待を持っているかのように、こちらを見てくる。

「チノちゃんとは付き合えない…」

そう伝えると、チノちゃんの表情が一転して暗くなってしまった。

「やっぱり…そうですよね…。私が…夜空さんと釣り合う訳がありませんよね…」

完全に暗くなってしまった…。

今更ではあるが…付き合おうと言うべきなのか…？

*選択肢（どちらかを選んでください）

1. やっぱり付き合う

2. それでもやっぱり振る

b
ル
ー
ト

「付き合わないって言ったけど…それ…撤回してもいい…？」

「撤回…？」

チノちゃんは、不思議そうに顔を傾げながら僕のことを見てくる。
というか…若干…さつきより、顔が穏やかなに見えなくもない。

「そう…付き合わないじゃなくて…付き合おうって事…」

「何言ってるんですか…?」

「えっ…?」

「夜空さんは、1回、私の告白を断ったじゃないですか!それなのに…撤回とか…プライドとかないんですか…?」

「なんで怒られてるの…。」

「チノちゃんの言っている事が正しいのは認めるけど…。」

「私の告白を断った…それが、夜空さんの本当の気持ちなんですよ?撤回したからって…その気持ちが変わるという保証がどこにあると言うんですか?」

「チノちゃんは、淡々と僕に向かって、撤回した理由を求めてきたりしてきた。」

「ごめん…」

「夜空さん…今回だけは見逃してあげます…ですから…私と恋人になつてくれますよね?」

「もちろん…ここまできて…断る訳がないよ…」

「そうですね…なら、キスをしてくれませんか…?」

「キスくらいなら全然大丈夫だよ」

と言うと、チノちゃんは、僕の身長に合わすようにしてキスをしてくる。

チノちゃんの口の中の味が、僕の口の中に入ってくる。

それと同時に…なんか変な味も入ってくる。

「夜空さん…しばらくの間…寝ててくださいいね？」

「へ？」

チノちゃんから言われたその言葉の意味が分からなかった…。

しかし、すぐに分かった。

何故なら…視界が段々と狭くなって、暗くなってしまうから。

最後へ

c
ル
ー
ト

チノちゃんが何かを訴えてくる目でこちらを見てくる。

告白を無かった事にして欲しいのか…。いや…。しかし…。そんな事ができる訳がない。

告白を一度振ったなら、受け取るなんて事はしない。

「さつき言った通りだけど…。チノちゃんの告白を受け取る事は出来ないんだ…」
とチノちゃんにそう伝える。

それを聞いたチノちゃんは、そつと顔を下に向けて…

「なんでですか…」

「チ…チノちゃん…?」

「なんで…告白を受け取ってくれないんですか…」

明らかにチノちゃんの様子がおかしい…。

「告白して…アピールしても…告白を受け取ってくれないんですか…」

自分の命に関わるくらい…。これは「まずい…。

「逃げようなんて…思わないでくださいね…」

とチノちゃんは、僕を抱きしめるように抱きついてきた。

逃がさないようにするために…抱きついてきている。

「逃げるなんて…一言も言っていないけど…」

「逃げると言つてなくても…夜空さんは「確実に逃げます…だから…」

「私・の・物・に・な・つ・て・く・だ・さ・い・ね」

チノちゃん ver2.0

「夜空さん…一体…これはどういう事ですか…?」

「それは…その…」

僕は、現在…チノちゃんに星座させられている。

原因は、ベッド下に隠していた例^エのブツ^本が見つかったしまつて、説教中なのだ。

「何故、隠していたんですか?素直に言ってくだされれば、許してあげますよ」

チノちゃんは、笑顔で言ってきた。

その笑顔の表情の奥には、早く言えという威圧感を感じる。

さあ…どうするかな。

*選択肢どちらかを選んでください。

1. 素直に理由を言う

2. まだ隠す

貴方は、素直に理由を言う

「チノちゃんにバレると思ったら…怒られると思ったら…」
「ですよ。こんな本を持つてると言われたら、私も怒りますよ」
とエロ本を手に持ちながらそう言ってくる。

それでも、本を開く事はないのだが。

「それに…どうして…胸の大きい人しか載ってない本を隠してたんですか？」

「うぐっ…」

そう言われ、恐る恐るチノちゃん表情を見ると、先程までの笑顔とは違って怒っている様子だった。

「胸のない貧乳の私では足りなかったんですよ…本当は胸の大きい人の方が良かったんですよね？」

僕の事を威圧してきながら言ってくるチノちゃん。

「…」

「どうして…何も言わないんですか！私に都合が悪いから黙ってるんですよ？何かしら言ってください！」

首元の袖を掴みながらそう言ってくる。

ヤンデレだから恐ろしいって思っていたが、ここまで来ると怖いと思ってしまう。

「胸が大きい人の方が好きって訳じゃないから」

「嘘です！あのエロ本を持つてる人がそんな訳ないじゃないですか！」

それは…確かだけど…。

まずい…このままの展開だと、確実にまずい…。

チノちゃんに押されているこの状況をなんとか打開しないと…。

「どうしたら許してくれる…？」

「そんな感じに言っても許しません！」

許してくれる方法を教えてもらおうとしたが…逆に怒らせてしまった…。

状況が更に悪化してしまった。

「許してくれよ…」

「ダメです。胸が大きい人がいいなら、リゼさんやココアさんと居ればいいじゃないですか！」

「違うって！」

「何が違うんですか！事実じゃないですか！」

ダメだ…このまま話を進めても…話を聞いてくれる気がしない。

「違うって！ココアさんとかリゼさんよりも、チノちゃんと一緒にいる方が楽しいんだって！」

「嘘です。ココアさんといつも楽しそうに話してるじゃないですか」

「あれは、チノちゃんの話題で話してるんだよ！」

「…本当ですか？」

「本当だって！心配ならココアさんに聞いたらいじゃないか」

「そうですね。後で聞きに行きます。もし、違ったら、分かっていますよね？」

「分かっている…よ」

その時のチノちゃんの目は光っていないくて、こちらより身長が低いはずなのに、凄い威圧を感じた。

「とりあえず許します。あくまで仮なのを忘れてないください」
仮でも許してくれるならありがたいよ。

貴方は、隠す事にした

「えっ？何の事かな？」

「ボケても無駄ですよ。証拠がたくさんあるので」

とチノちゃんにちよこちよここと近づいてきて、

「これは、監禁しますね。理由を言っても開放はしませんからね」

とチノちゃんに掴まれて、そのままどこかの部屋へと連行されたのだった。

桐間紗路 ver1.0

貴方には、可愛い幼馴染が居て…お隣に住んでいます。

しかし…ある日、

「夜空君？どうして、私と付き合ってるのに、千夜とデートしてたの？」

「いや…それはだな…」

実はというと…紗路と付き合い始めて1ヶ月が経つという事で、紗路にプレゼントを
したいと思った僕は、千夜にプレゼント選びに付き合ってもらっていた。

しかし、それを紗路に見られていたらしく、今の状況に至る訳である。

「千夜と何してたの？私に黙ってデートでもしないと行けない事もあるの？」

こうして、紗路から圧をかけられているのだ…。

「いやだから…」

「それに…手に持つてる奴は何？千夜との婚姻届とかじゃないでしょうね？」

* 選択肢（どちらかを選んでください）

1. 素直にプレゼントを渡す
2. 意地でも隠し通す

貴方は、素直にプレゼントを渡した

「そんな訳ないだろ！」

と言いながら、僕は、紗路に千夜と一緒に買ってきたプレゼントを渡す。

「これは？」

「ほら…もう少しで付き合い始めてから1ヶ月だし…何かプレゼントした方がいいかなって思ってた…」

と頬を掻き、ちょっと照れながら紗路に言う。

こう見えて…こういうの渡すの恥ずかしいんだ…

「それで、千夜にプレゼント選び手伝って貰ったんだ」

と言うと、プレゼントを貰って嬉しそうにしていた紗路の表情がまた病み始めた。

「私にプレゼントしてくれるのは嬉しいけど…他の女とデートはしてほしくないだけ

ど…」

「ごめんって！でも、紗路にプレゼント渡すのに、紗路が付いてきたらプレゼントにならないでしょ？」

「それもそうね。今回は許してあげるわ」

紗路からなんとか許しをもらえたようだ…。

とりあえずは、ホツとした。

と完全に緩みきっていたから、あーなってしまったのだろうか…

「それで…中身は…」

紗路がプレゼントを開け、中身を取り出すと…

「あっ…それ、千夜の…」

「夜空？私にプレゼントは嬉しいわ…」

これ…完全に終わった…。

「私にこんな大きなブラ付けれないわよ…」

と言いながら、距離を段々と取ってくる紗路…

「それに…私がいるのに、千夜と言ったわよね？」

「…」

さっきまでの様子とは全く正反対になって紗路の雰囲気、何も言えなくなっ

まった…

「ユルサナイワ…夜空にはきつちりと罰を受けてもらえないといけないわね」

そして、その場の雰囲気には絶えきれなくなった僕は逃げ出した。

逃げた先は、甘兎庵…千夜ならなんとかしてくれと思うたからだ

「私より千夜の方がいいんだ…」

「紗路ちゃん、落ちついて…紗路ちゃんらしくはないわよ」

「そんなに、私より千夜と一緒にがいいならそうしてあげるわ」

そして、僕と千夜は紗路に襲われてしまった…。

『ニュースです。とある喫茶店で殺人事件が起き、1人の死亡が確認されました。また、DNA鑑定で亡くなった1人の者とは違うDNAが大量に検出された事から、被害者はもう1人いるかと思われ、その遺体はまだ見つかってません。警察は、その遺体と犯人の行方を追っています』

とある場所

「夜空：貴方は死んでしまったけど、もう大丈夫よ。これからは私がずっと一緒に居てあげるわ、だからね」

「私は夜空の前でアムリタを呑み、不死を得るの

何で分かる？

夜空が死んでもずっと愛し続けていたいし、寄り添っていたい…。

夜空の亡骸と共に…。」

貴方は、意地でも隠し通す事にした

「婚姻届じゃないって！」

そう言いながら、プレゼントがバレないように紗路からは見えないようにする。

「でも、それだったらどうして隠す必要があるのかしら？」

「それは……」

このままでは確実にバレてしまう……。

それだけはなんとかしなくては……

「さっさとその手に持つてる物出しなさいよ！」

としびれを切らしたのか、紗路が僕に向かって特攻してきた。

紗路の急な特攻に思わずびっくりして、手に持っているプレゼントを落としそうのなるが……なんとか落とさなくて済んだ。

「嫌だ」

「その箱の中身を見せなさいよ！ 違ったら素直に謝るから」

と紗路と一連のやりとりをしている間に…プレゼントの箱を見られたらしく…箱はばれたが…中身までは見られてないようだ。

そして、違ったら謝ると言っているが…あまり信用できない…。今の紗路の様子を見ていると更にそう思ってしまう…。

「そこまで…嫌なら…私にだって考えがあるわ…」

紗路はさつきまで僕とやりやっていたのに、急にそんな事をいい始め、台所の方へと向かって…

「紗路…まさか…」

「そうよ…夜空が動けなくなったらその箱の中身を見ることが出来るでしょ？」

と手にナイフを持って、段々と近づいてくる。

「おい…そこでやめとけ…」

「夜空…その箱の中身を見せないから悪いのよ…」

そして、紗路は僕にとびかかってきて…

「紗路…うわあああああああ」

手に持ったナイフを僕に向かって刺してきたのだ……

「…なんだ…私へのプレゼントだったのね…早とちりしちゃったわ」

私は、目の前でもう動く事のない物を見て、そう呟く。

「素直に渡してくれば良かったのに、なんでそんなに渡したくなかったのかしら…」

と私は、彼の頭を撫でながら言う。

「でも…私も貴方も悩む必要はないわね…」

と手に持っている薬を見てそう言う。

「夜空…私も今からそっちに行くわね。そして

一生愛しまし
ようね

それから、
次の日

紗路の家から、2人の遺体が見つかったという事件は当時話題になったものの…時間が経てば忘れ去られるのだった。

ここあ ver1.0

「これは、どういう事が説明してくれる…?」

貴方は、ベットのの上にここあによって押し倒され、手に鎖をかけられて、ココアに質問責めをされている状態である。

そこには、チノちゃんの寝顔の画面が映っていた。

「なんで私がいるのに、チノちゃんの写真を撮ってるの?」

貴方は、ココアからの圧に、思わずひるんでしまう。

しかし、貴方はすぐに反撃をする。

「ココアこそ、俺のスマホ勝手に取ってるじゃねえか!それこそ、犯罪だぞ!」

ココアから見せられたスマホは、貴方の物で、ベットに固定され、気絶させられた時に、ポケットから盗まれて、この状況になったのである。

だから、窃盗という犯罪と強く言う。

「なんで…そんな事を言うの…？私は、夜空君のためを思つて…やってるのに…」

ココアは、そんな事を言いながら、さつきと同じような感じで言つてきた。

「ココア…お前…本当にどうしたんだよ…」

流石に、ここまでくると、圧に負けるといふより、心配の方が強くなつてくる。

たつたチノちゃんの写真だけで、ここまで変わるの…もう心配レベルだ…

「夜空君が…私の事しか見ないと云つたのに…こうやって…チノちゃんの写真を撮つて
るからだよ…」

ココアは、あの元気そうな声はどこへいったというのか…弱弱しい声で聞こえてくる。

「だから、夜空君をこうすれば、チノちゃんの写真を撮れないし、私以外の女の子たちとも関わらないようにできるからね」

貴方は、ココアの言葉で、ベットに固定されている理由を理解した。

そして、その原因になつたであろうことも、同時に浮かんでくる。

まずは、ココアに質問されているチノちゃんの写真。

これは、チノちゃんから『一緒に寝てください』と言われて、一緒にのベットに入って、

先にチノちゃんが寝てから撮った写真。

そして、チノちゃんとは、この一件以外にも、買い物デートや事故とはいえ…胸を触れてしまったり、風邪によってスカートで浮き上がってしまったってパンツが見えてしまったりだとか色々とおあった。

「おまけに、私も見た事ない、チノちゃんのパンツを見たとかね！」

どこからその情報を仕入れてきたのか…もしくは、チノちゃんとのデートの際に、ただのストーカー行為こっそりと着いてきて、見たのか。

どうであれ、バレている事に違いはないのだが…

「だから…夜空君は死刑だよね…私を裏切った事と、チノちゃんのパンツを見た事で」

と言いながら、ココアは背後から凄く磨かれ、部屋の蛍光灯できらりと光るナイフの矛先を貴方に向ける。

その光景を見た、貴方は慌て始める。

そして、行動をしようとしたのだが…すっかりと鎖によってベットと固定されている事を忘れていた。

「痛ったあああ!!」

無理矢理動かこうとしたため、鎖が手の肉を引き裂くような痛みを貴方に与えたのだ
「何勝手に自爆しているの?もしかして、私が苦しんだ痛みをわざわざ自分から受けて
るの?」

痛がっているあなたを見たココアは、心配そうな未振りをせず、そんな事を言っ

「もつと痛がって…私の苦痛をもつと味わってね」

とココアは、ナイフを貴方に突き刺す。

貴方は、あまりにも痛みで…声に出せない…

「夜空君…あつちの世界でまた、会おうね…それじゃ」

バイ
バイ
バイ